

多くの方々からの激励のお言葉ありがとうございます。皆さんの後押しに非常に感謝しています。昨日岩手県から沖縄へ戻りました。拠点となっていた宮古は幸いにも役場の人・保健師等は津波からぎりぎりのところで逃げる事ができたようで行政が残っていたのでそのような地域の情報のみですがご了承ください。

今回は岩手県が医療支援を求めたのに対し沖縄県が1カ月間チームを5日交代で送り続けることを決めました。その第一陣(医師2名、看護師2名、事務2名)の一人として私は参加しました。3月22日に沖縄から東京へ飛び、予め物資を積みフェリーで送っていた救急車2台を東京から岩手県へひたすら運転しました。東北自動車道は緊急車両専用となっており、全国から支援に向かう警察・自衛隊・土木業者等が集まり異様な雰囲気でした。

24日ようやく宮古入りし、2日前の情報とは全く異なり、ライフラインはなんとかほぼ復旧していました。私たちは三つの避難所を担当し、住民の健康相談・内服薬の処方等を行っていきました。岩手県で沖縄ナンバーの救急車が走っているのを見ては人々は目が点になり、そこから話が膨らむのがとても楽しかったです。

震災から約2週間経ってからの活動でしたので慢性期に移行しており、寝たきり患者や医療行為の必要な住民は全員病院や施設への移動の準備がされていました。「私は大丈夫です」とおっしゃる住民が多いが、しかしよくよく話を聞くと内服薬が切れている方が非常に多かったです。車を持っている住民が多いもののガソリンスタンドは100台待ち、かつお金の心配をされている方もいたのでしょうか。皆声をあげずに不安を抱えている状況でした。

盛岡のホテルに移動する人を募集していたものの手を挙げる住民はわずか。いくら不便であっても自分たちで町を復興させたいという強い気持ちがあるようで、私はついつい納得してしまいました。昼間は家の片づけや仕事をしに皆外出するため、避難所は閑散としていました。地元の中学生のボランティアは大活躍しており、予想していた「悲壮感」は全くなく、私はむしろ地元の人々の結びつきと再び立ち上がろうとする強い気

持ちに安堵を感じながら岩手を去ることができました。町のどこに行っても「ご自由にどうぞ」と寄付された洋服や生活物品が置かれており、被災していない住民からの助けの手も色々な所で感じられました。

同時に「支援」や「援助」という概念についても深く考えさせられました。報道されていた食糧不足のピークは過ぎており、避難所も落ち着いており、沖縄チームも現地に入ってから地元の人たちの再生する力に圧倒されるばかりでした。ライフラインの素早い復旧も日本ならではの、幸いにも行政が残っていた宮古では災害後の復興の骨組みは既に出来上がっていました。他都道府県から乗り込んであれこれ言うのではなく、各自治体の「お手伝い」をしながら見守るのが今後私たちがすべきことではないかと思いました。これはもちろん宮古に限ったことであり、行政が残っていない他地域に関しては自衛隊・国境なき医師団・赤十字が担当しており、その地域の情報が全く入ってこなかったのが非常に残念でした。縦のつながりがしっかりしていた分、横のつながりがまだまだ欠けていました。また、一番最初に支援を要請した福島県にはなかなか積極的に行く団体がおらず、物資を運搬するのさえためらっていて心苦しい限りです。

これからどんどん通信手段が改善されることで復旧の格差もなくなることが期待されています。直接的な援助をしたい、何かしたいと悶々とする人はたくさんおられると思いますが、現場の混乱やガソリン不足を考えると今は見守って募金活動に励んでもよいのではと感じました。「沖縄でもこの津波のニュースは流れているのかね?」と尋ねる避難者もあり、私はひたすら日本中・世界中の人々が東北の人たちを気にかけていることを伝えてまわりました。直接このような活動に加わるのがスゴイともなんとも思いません。継続して被災者を応援する気持ちをこれから何年間も持ち続け、毎日節電等を通して何かを犠牲にし続けることが一番復興につながると思います。

私のこれからの人生にとってかけがえのない5日間となりました。ひとまず沖縄での看護の仕事に戻り、今後どうするか考えていきたいです。ここまでこれたのは皆さんのおかげです。ありがとうございます。 <2011年3月27日報告>

